

ラフカディオ・ハーンとケルト文化

渡 辺 忠 夫

ラフカディオ・ハーンは非対称の世界を主導した再話作言と言えよう。逸脱者である。キリスト教、欧米、白人の上位主義、ロンドン、ニューヨークの産業技術文明の主導する近代都市文化の批判者であった。関心をつねに中心ではなく、週縁に追いやられている、クレオール、オリエント、有色人種の文化、生活、民話、習慣、伝承にあったと言えよう⁽¹⁾。

ハーンの逸脱性はみずからの世界観、芸術観を表述したつぎの文に読みとることが出来る。

How frightful to have to live altogether according to the proprieties! I'd rather die. Everything charming in life, as in Japanese art, is Irregularity and Eccentricity. The Perfect Regular, the Mathematically Collect, is barbarism, and cruelty. Nay, it is a violation of all Natural law: for all tendencies to evolutionary progress come. In the shape of invisible tendencies to deviate from the common herd⁽²⁾.

"Irregularity", "Eccentricity" に注視し、"barbarism", "cruelty" から離脱することが "Natural law" にかなうと解釈しえる。

この“自然法”⁽³⁾ に準拠した逸脱性はハーンひとりだけに帰するわけではわない。ケルト文化の特異性とふかく関連している。この関連はすでに拙論で提言している⁽⁴⁾。しかし、本論ではこの関連、継承を主題として解析し、統合、展望することにしたい。

20世紀までの伝統文化、芸術、写実主義、実存主義を覆す媒介となったのがケルト文化であったとあらかじめ最終結論に至るまでのプロセスのひとつとしてまず記述しておきたい⁽⁴⁾。

Britany 出身の評家、Renan Ernest は *Poetry of the Celtic Races* のなかでアングロサクソン作の叙事詩 *Beowulf* 批判をつぎのように展開している。

Compare the Teutonic with the Gaelic hero, — Beowulf with Peredur, for example. What a difference there is! In the one all the horror of disgusting and blood-embued barbarism, the drunkenness of carnage, the disinterested taste, if I may say so, for destruction and death, in the other a profound sense of justice⁽⁵⁾,

この批判からケルト文化の本質を Arnest がどこに据えているか推定しえよう。つまり、

"a profound sense of justice⁽⁶⁾."

ではこのような本質がいかに形成されたのか。他民族の侵略からの "flights" が契機となっている

と Arnest は記述している。

The cymric hero ... even in his wildest flights, seems possessed by habits of kindness and a warm sympathy with the weak. Sympathy in deed is one of deepest feeling's among the Celtic peoples⁽⁷⁾.

"flights" はつぎの "exiles", "defeats", "elegies", "tear", "sadness", "lament" と小国ゆえの弱者の歴史的、重層的エートスと連なると言えよう。

ケルト民族のエートスは他にもいくつか明示されている。

第一.

Especially is it forgot on that this little people, ... is in possession of a literature ... in the Middle Ages, exercised an immense influence, changed the current of European civilization, and imposed its poetical motives on nearly the whole of Christendom⁽⁸⁾,

第二.

Powerful indivisuality, hatred of the foreigner, has formed the essential feature of the Celtic peoples ... we must search for the explanation of the chief features of the Celtic character. It has all failings, and all the good qualities, of the solitary man, at once proud and timid, strong in feeling and feeble in action at home free and unreserved to the outside awkward and embarrassed. It distrusts the foreigner, ... It is before all else a domestic race, fitted for family life and fireside joys. In no other race has the bond of blood been stronger, ... Every social institution of the Celtic peoples was ... only an extension of the family⁽⁹⁾.

第三.

If it be permitted us to assign sex to nations as to individuals, we should have to say without hesitation that the Celtic race, especially with regard to its Cymrie or Breton branches, is an feminine race... No other has conceived with more delicacy the ideal of woman, or been more fully dominated by it. It is a sort of intoxication, a madness, a vertigo⁽¹⁰⁾.

第四.

What strikes one at a first glance in the imaginative compositions of the Celtic races ... is the extreme mildness of manners pervading them⁽¹¹⁾.

他にも例証はしている。Arnest の意図はこれまでの記述だけでは十分とは言えないことは当然であろう。補足、整理が少なからず必須である。まず、例証のなかの "exquisite" "unreserved" "intoxication" "extreme mildness" に注視したい。いずれも "balance", "measure", "patience" の欠落したエートスである。あえて“節度”を放棄した表述と言える。なぜか。他民族とりわけ "Great Britain" との対比をきわ立たせようとの意図が働いたと考えられる。

他には女性崇拜がケルト民族の特長としてあげられている。この特長は "Chivalrous gallantry" に由来すると提言している。確かしであろう。

いくつかの例証、統合からハーンには通底するケルト民族のエートスが生得的、意識的に継承され

ていることが了解されうると言える。

これからの問題はハーンの再話文学に表出しているケルト文化のエートスをニューオーリンズ、マルティニーク、極東の日本での体験、言説のなかで模索することにある。

1. ニューオーリンズとクレオール

不足の事態がラフカディオ・ハーンをニューオーリンズに "exile" させた言っただけであろう。1877年、不測の事態とは⁽¹²⁾。第一は Foley, Alethea, (Mattie) との結婚、破綻である。破綻の主たる原因はオハイオ州の法では白人と黒人のとの結婚が禁止されていたのである。

An Ohio law, valid only between 1861 and 1877, prohibited the perform-ance of a marriage between a white person and Negro⁽¹³⁾.

第二。"the Enquirer" の記者を解雇された後、the "commercial" 社に採用される。インクワイアラー社の場合は悪らつな政治家の圧力とされている。ハーンがシンシナティのあの白人上流階級の近づけない "Bucktown" での殺人、売春、恐喝の暗部を暴いたせいとされた⁽¹⁴⁾。

His leaving Cincinnati was a flight than a planned and sensible migration. He could no longer breathe an atmosphere of disapproval, and echo of which, for a different cause, he found in himself and carried with him.

That Hearn's in this disapproval was not altogether imaginary could be tested in the Cincinnati of eighty years after the event⁽¹⁵⁾.

不快な "flight", "disapproval" としか言いようがないであろう。

ニュー・オーリンズへの移住の根拠は "flight" 以外にはハーン特有の温和な気候への願望であり、ロマン的気質の表われが付加されよう。例えば、"cold" ではなく、"color" "the far-off and and strange", "a place all softness", "brightness" "warmth" を希求してのことであって、確たる指針があったとは思われない。ひたすら遠隔の温暖な南部をめざさせただけでであろう。

なぜなら、ニュー・オーリンズでの生活設計がはじめから破綻していたからである。下宿の前金を払うと貯えがなくなり、職探しにほん走しなくてはならなかった。生活苦の日夜である。しかもデング熱を患う不運に苛まされた。

ニューオーリンズではクレオール文化と小説 *Chita* に限定して論ずることにしたい。

まずニュー・オーリンズで新聞記者として取材するにはクレオール語の学習が欠かせないと判断し、採集し、記録した。Cott, Jonathan はハーンのクレオール文化への傾倒をつぎのように提示している。

One of Lafcadio's principal interests in New Orleans was reflected in his large collection of Creole dictionaries, grammars, and books of Creole legends and folklore from both the French West Indies and Louisiana. Not content to depend only on book knowledge, however, he set out to reach himself the local Creole patois, referred to superciliously by the "the

invading *Amerikain* (Lafcadio's phrase and spelling) as *Gumbo* or *Gumbo*. In New Orleans, Creole was spoken in the *vié faubon* (as black Creole children called those oldest parts of New Orleans at the farthest remove from the river and American section of town south of Canal Street)⁽¹⁶⁾.

他にいくつか提示するなら、まず第一は例のあのクレオール的女性、Leona Quey-rouze から "the correct pronunciation of black Creole proverbs" を教えられた⁽¹⁷⁾。

第二。ニューオーリンズに移住してからのクレオールのはじめての信頼しうる友人のひとりである Matas, Rudoph 医師との出会いである。この出会いがハーンにニューオーリンズ的生活習慣、夜の喧騒、飲食の場を体験させ、さらにはつぎのような友情の証しとして接待をうけた。

As a seal upon their friendship, Matas introduced him into the sacred seclusion of a Creole house and made him a friend of his wife⁽¹⁸⁾.

しかも、夫人はクレ奥ールの語り部となってくれた。

Creole talk, Creole proverbs, recipies, anecdotes, attitudes, … Creole folklore⁽¹⁹⁾

第三は Mc Williams, Vera の提言である。

Williams はクレオールをまず "patois" を前提とする視点から論述している。この視点はクレオール人はもとより南部文化の衰退とみつに関わっている証しと言えよう。例の南北戦争をもって言語、文化の地方化が不可避となった。つまり、北米の言語、文化が南部を支配する体制に変容したのである。したがってクレ奥ールの言語、文化も体制に適合しなくなった。くり返すことになるが地方の言語、文化のひとつになったと言える。しかし、"pride" を失うことはなかった。Mc Williams はハーンと "the Creole patois" の関連を下記のように展開している。

He began studying and writing about the dialect of New Orleans folklore – the Creole patois. The Creole patois, 'offspring of linguistic miscegenation,' was spoken not only by Negroes and mixed-bloods in Gulf States, but throughout the French West Indies as well… Soon he was putting Creole poems and songs … in his … letters … He even included a poem in Martinique Creole, comparing with Louisiana dialect⁽²⁰⁾.

2. ニューオーリンズと *Chita*

Youma ではなく *Chita* を扱ったのには特別な根拠があるわけではない。執筆がニューオーリンズで開始されせいであり、前の論述と重なる視点が少なからずあると言うだけのことである。

Chita: A Memory of hast Island, が 1889 年に Harpar and Brother から出版された。クレ奥ールの少女チータの悲劇、再生の素描である。溺死した母親の腕で守られて生き残ったクレ奥ールの少女が漁師に救われ、亡くなった娘のかわりに夫婦の養女として育てられた。11 年後、実父 Julien の実子とわかりニュー・オーリンズに連れてこられる。が、チータは実父と再会するが気付かず、しかもこの都市に馴れず養父母の島にもどり漁師と結婚する。実父は再会の後、病死する。

問題なのはなぜチータがニューオーリンズに止まらなかったのかである。この問題はハーンの文明批判とふかく関わっている。Stevenson の言説はこの証しと言える。

New Oreleans began to seem a narrow of corner of the universe, changing unpleasantly, trying to be like Cincinati. New Oreleans was never quite successful in this effort, but Heavn did not stay to see that something of the Latin, something of Creole persist there. It was the nor mality of progressive in dustrial America that seemed, in the 1880's, to be the threaten- ing his idyl of a Creole city. omparing with Louisiana dialect⁽²¹⁾.

再述することになるが、アメリカの産業技術文明が、クレオール文化の自立を抑圧することになるとの言説である。クレオール文化が抑圧され、衰退することは歴史のダイナリズムと言えよう。しかもハーンにとって南部はあくまでも部外者、他国者、異邦人の地方にすぎなかった。この問題については後日の論考にゆずりたい。

3. マルティニークと女性原理

ハーンのマルティニークへの願望はあの Leona Queyrouze のクレオールのメイドである Marie との対話にまず伺える。Marie はマルティニーク出身の女性である。対話、質問の文言である。

"... Tell me something new about your beautiful country...you know I am going there sometime, before long⁽²²⁾."

この主題のもとではクレオールの家政婦、Cyrillia との交友を通してハーンの女性原理を問題とすることにしたい。

Cyrillia はハーンにとってあの語り部につらなる女性とまず解釈づけられよう。なぜなら、ハーンと対話を交し、癒しに喜びを感じているからである。母性のエートスの体現者と言えよう。

He... listened her version of cosmos seriously and sympathetically. He had a photography of her daughter ... and found in front of it talking to it as she talked to her footless virgin in a tiny box-to *chappelle*.⁽²³⁾

娘と聖母マリアに "talking", "talked" のくり反しの言葉からも話しかけずにいられないエートスを持っている。しかも複数のマルティニークの住民とハーンとの出会い、交友の仲介者にすらなっている。

In addition to good terms he and Cyrillia had come to, and the daily cemony of friendship with the inhabitants up and dow the narrow street, Hearn had now a pleasant entanglement with a circle of acquaintances in the city⁽²⁴⁾

Cyrillia は生母 Rosa、シンシナティの Mattie につらなるたくみな "story teller" である。

しかも、Cyrillia はハーンの衣食住の世話はもとより、都民との社交の伴の主導者に変身している。この変身から Cyrillia はハーンと共同体と結ぶ段階から飛躍、転移し、女性原理の体現者となったと言えよう。

ハーンはこれまで周知のように男女の性差を問わずに交わり、信頼した女性は Cyrillia だけではない。ここでは詳述しないが、Bisland, Elizabeth とハーンとの関連がこの原理の祖型をなすと言える。ビスランドとハーンの交友はアメリカ在住の死に至るまで不断に続いたと言える。東大を解任されたハーンのあらたなる職をアメリカで懸命に探してくれたのもビスランドであった。感謝の念から「妖精の女王」と敬ったと関田かをる氏は解説しているし、ビスランドはともかく、女性原理を論究し、提示したのが Murray, Paul である。

love was the creator of great thoughts and great deeds; all history was illuminated by the 'Eternal Feminine'⁽²⁵⁾

ハーンとビスランドの関係はあらためて論議しなくてはならない問題であろう。

男性、女性のいずれにも偏しない公平な共生の世界が理想である。ハーンの世紀末にはこの共生の関係を阻害する要因があったことはすで述通りである。したがって女性原理をつらぬいたとしても体制の反逆者、ケルト文化の継承者、ハーンの生きざまとしてはずれていなかったと推測してもよいであろう。

4. 神戸時代と保守主義のエートス

1894年、ハーン家族は熊本から神戸に移住する。ハーンの希望はすぐさま幻滅に転化する。なぜか。ハーンのシンシナティ、ニューオーリンズの不協和が神戸の開港地に在留する欧米人に転位し、不快にさせた。近代化されたロンドン、ニューヨークを実体験したハーンにとって未成熟にしか都市化されていない神戸での欧米人の生活態度は仮面、擬態、過信にすぎなかったと言えよう。

小題の保守主義者のエートスとは、在留する欧米人とはまるで正反対の世界観、価値観の担い主の生活態度である。

非対称の明治人の悔恨、再生の表述である。この明治の欧米からの帰国者の軌跡を1896年 *Kokoro* に収録された“A Conservative”で解釈することによって明らかにしたい。解釈の主題は近代文明の伝統文化に対する侵食の構図にすえることにする。作品の書き出しはつぎの言文で始まる。

He was born in a city of the interior, the seat of a daimyō of three hundred thousand koku, where no foreigner had ever been⁽²⁶⁾.

この言文から、彼はこれまで一度も外国人を見たことがなかった事実が分る。しかも藩主は特に子弟の教育にイギリス人を採用した。

彼は英語を学び、イギリス人と会話ができればほど自信をつけた。さらに横浜で異文化に接し、日本のおかれている不当なる差別、欧米の上位意識を自覚させられる。日本への差別、欧米人の上位意識はいかなる根拠にもとづくのか。青年はキリスト教、産業、科学、文明の相異が根拠と考えた。まずキリスト教、聖書の学習を始めた。学習するなかでひとりの老いた宣教師に出会い、“convert”するにまでに高揚した。

an aged missionary……the old man was especially anxious to convert this young man……He

taught him something of French and German, of Greek and Latin……⁽²⁷⁾

しかし改宗の公言はいくつかの障害があった。例えば親族の反対である。

the opposition of his kindred.

It was a bold step. ……he was not to be moved from his decision even by the sorrow of his parents. His rejection of ancestral faith……it would mean disinheritance, the contempt, loss of rank, and all consequences of poverty⁽²⁸⁾.

にもかかわらず、幼児からの“samurai training”で障害を克服し、信念をつらぬいたとされている。

But his samurai training had taught him to despise self. He saw what he believed to be his duty as a patriot as a truth seeker; and follow it without fear or regret⁽²⁹⁾

結論から言えば、青年の志は幻滅に終る。青年が見聞したフランス、イギリス、アメリカの19世紀後半はこれまでの文明、産業、科学の仕組みが崩れ、歪み、転換の最中であったのである。いわゆる世紀末の官能主義、耽美主義、物質主義、効率主義、拝金主義、貧富の拡大、労働争議。道徳の低下、不倫、売春、信仰心の希薄化。収奪、偽善、狡滑。例えば、イギリスでの文明批判。

……English Civilization showed less than any other the pretended power of that religion which he had been taught to believe the inspiration of progress.

English streets told him another story: there were no such sight to be seen in the streets of Buddisut cities.

No: this civilization signified a perpetual wicked struggle between the simple and the cunning, the feeble and the strong; force and craft combining to thrust weakness into a yawning and visible hell⁽³⁰⁾.

ドイツ、フランスも例外ではない。文明の混沌、屈折。したがってキリスト教の破棄は必然の帰結であったと言えよう。つまり、日本文化への回帰である。しかし改宗、破教のいずれも性急であったことは否めない。

しかも文明批判のなかには検討する部分がすくなからずある。例えば、体験、観察、分析のずれ。これらの検討をふくめつぎの主題は極東の日本文化をハーンがどのように捉えているかを論考することにしたい。回帰はブレイクスルーの始まりであることをあらかじめ提言しておきたい。

注

(1) 拙論、「ラフカディオ・ハーンとモダニズム」、『文化科学研究』、中京大学文化科学研所、2003 Vol.15 No.1. p.6.

(2) Stevenson, Elizabeth. Lafcadio Hearn. The Mac Millan Company, New York., 1961, p.262.

(3) “自然法”をケトル文化との関わりでとらえ直すならつぎのような言説となるであろう。“balance”, “measure”, “patience”への毅然とした拒絶のエートスである。このエートスはケトル民族の度かさなる“exiles”のなかで培われたと言えよう。つまり、弱者の強者への抵抗の精神性であって合理性とは背反する。非対称の倫理である。拙論、「ラフカディオ・ハーンと逸脱のエートス」、『文化科学研究』。中京大学

- 文化科学研究所、2004. p.6.
- (4) 拙論、「ラフカディオ・ハーンと反逆のエートス」「ラフカディオ・ハーンと不協和音」、『外国文学研究』、中京大学外国語研究会、2004. pp.33-51.
- (5) Ralph Adams Brown, ed., *Poethy of the Cetic Races*, Kennikat Press Port Washington, N.Y. London, 1896, p.15.
- (6) Ibid.
- (7) Ibid., p.14.
- (8) Ibid., p.2.
- (9) Ibid., p.5.
- (10) Ibid., p.8.
- (11) Ibid., pp.14-15.
- (12) ハーンの半生は不測の事態の連続であったと言っても過ぎることはないであろう。父母の不当なる離婚、ブレナン夫人の破産ともなう神学校の退学、失明、ロンドンでのスラム街での貧苦の生活、アメリカ移住。数えあげればきりが無い。“宿命の女”ではなく、“宿命の男”と言えよう。
- (13) Stevenson, p.52.
- (14) 拙論、「ラフカディオ・ハーンと反逆のエートス」『外国文学研究』、中京大学外国語研究会、2004. pp.38-39. 拙論、「ラフカディオ・ハーンとモダニズム」『文化科学研究』、中京大学文化科学研究所、2003. pp.3-4.
- (15) Stevenson, p.72.
- (16) Cotto, Jonathan, *Wondering Ghost*, A Knoph, New York. 1990, p.136.
- (17) Ibid., p.202.
- (18) Stevenson, p.131.
- (19) Ibid.
- (20) Mc Williams, Veras., *Lafcadio Hearn*. Boston, Houghton Mifflin Co., 1946. p.100.
- (21) Stevenson, p.50.
- (22) Ibid., p.152.
- (23) Ibid., p.175.
- (24) Ibid.
- (25) Murray, Paul, *A Fantastis Journey*. JAPAN LIBRARY, Sandgate, Forkestone, Kent. 1993. p.171.
- (26) KOKORO, *Lafcadio Hearn*, Boston and New York, Houghton Mifflin Company, 1999, p.393. 引用文は臨川の復刻板をつかったことを付言しておきたい。
- (27) Ibid., p.405.
- (28) Ibid., p.408.
- (29) Ibid., p.408.
- (30) Ibid., pp.416-417.